ヘテロトピアとしての端島/軍艦島
――「負の記憶」をめぐる言説の配置をてがかりに――

Hashima/Battleship-Island as a heterotopia
—— By reference to the disposition of discourses
on its “negative memories”

葉柳 和則（HAYANAGI, Kazunori）
長崎大学

はじめに

長崎市の中心部から南西約 20 ㎞の海上に、端島という名の小さな島が浮かんでいる。面積 0.06㎢[2]のこの島は明治期から 1974 年まで、三菱系企業[1]が所有する海底炭鉱として栄えていた。近隣の高島炭鉱とともに良質の燃料炭を産出することで知られ、近代日本の下部構造の一端を担っていた。島影が戦艦「土佐」に似ていたことから、一般には「軍艦島」という通称で知られている。1974 年の閉山以降、島は無人となり、外海の潮風に晒された島内の建築物は急速に風化していく。同時にこの島の記憶もまた消え去っていくかに思われた。ところが 1990 代後半になると、この島は日本の近代化と経済成長を象徴する産業遺産として脚光を浴び、21 世紀初頭には長崎市を代表する産業遺産のひとつとして多くの観光客を集めるようになった。

長崎市は、明治期から今日まで一貫して三菱の企業城下町としての性格を強く持っている。しかし、第二次世界戦後は観光都市としてのアイデンティティを前景化させてきた。主要な観光資源としては、近世のカトリック布教・弾圧関連、オランダ貿易関連、中国貿易関連、明治維新と開国関連遺産があり、1950 年代以降、原爆関連遺産がこれに加わった。そして 20 世紀末になって、端島/軍艦島という遺産が新たに見出されたのである。

1930 年代の末以降、石炭増産の必要性の高まりと徴兵による労働者不足を補うために、日本の炭鉱では朝鮮系および中国系の労働者が強制的労働に従事させられた[2]。長崎県の主要炭鉱はいずれも島嶼部に位置しているため、本土の工場や鉱山よりも労働環境は過酷であり、「一に高島、二に端島、三に崎戸の鬼ヶ島」[3]と労働者たちから恐れられていた。

---

[1] 閉山時点での所有者は三菱マテリアル株式会社。本稿では社名の変遷については省略し、一括して「三菱」と記述する。

[2] 1944(昭和 19)年の時点で、端島/軍艦島の炭鉱労働者の数は、日本人 1,603 人、朝鮮人 500 人、中国人 205 人、合計 2,308 人であった(長崎在日朝鮮人の人権を守る会 2011: 121)。以下では「守る会」と略記する。本稿では、原則として「朝鮮人」、「中国人」ではなく、「朝鮮系」、「中国系」の表記を使用するが、引用または参照している典拠での表記を優先する。

[3] 高島は端島の北東 2.5km に位置する炭鉱島である。崎戸は現在の西海市の位置しており、長崎県では最大の規模の炭鉱であった。いずれも三菱によって経営されていた。

朝鮮系および中国系の労働者は、坑内での作業、住環境、食事、行動の制約等、島での生活全般に亘って日本系の労働者よりも劣悪な環境に置かれており、死亡率も日本系の労働者より高かった[4]。つまり、この島は近代日本の下部構造を支えると同時に、その裏面に生起した「負の歴史」の舞台でもあったのである。

本稿は端島/軍艦島に関する新聞記事をデータとして取り上げ、主として言説の配置に着目して、この島をめぐる表象の力学を明らかにすることを試みる。

１．端島小史(採掘開始から閉山まで)

端島で石炭が発見されたのは 1810 年のことであり、1870 年頃から漁師の副業として露出炭の採掘が始まった。明治以降、本格的な採掘が試みられたが、事業としては失敗が続いた。しかし、1883 年に元佐賀藩深堀領主鍋島孫六郎の所有となり、近代的設備が導入され、さらに、1890 年に三菱の岩崎弥太郎がこの島を買収し、操業を軌道に乗せた。以後 2001 年に旧高島町に譲渡されるまでの間、この島の所有者は三菱系企業であった。

この島は、元々は洋上の一岩礁にすぎなかったが、防波堤工事を繰り返すことによって、約 2.8 倍の広さまで拡大された。鉱区は地下 1,000ｍを超える深海底に拡がっており、最盛期には年間 41 万トンを超える出炭があった。島には、1916 年に建築された日本初の鉄筋コンクリート製の高層建築をはじめとする住居用の建築物が 50 棟近く密集しており、学校、商店、病院、神社、映画館、娼館などと合わせて、ひとつの都市を形成していた。

端島/軍艦島に朝鮮系の労働者が強制連行されてきたのは 1939 年のことであるが、それ以前から朝鮮系、中国系の労働者は雇用されており、たとえば朝鮮系労働者の組織的募集は 1917 年に開始されている。1910 年代の中頃になると、近代日本の鉱山特有の労務管理システムである納屋制度がほぼ全面的に廃止されたこと、および、1937 年の日中戦争の勃発と 1938 年の国家総動法に基づく戦時体制への移行に伴い、日本の本土内では炭鉱労働者の大幅な不足が生じたことから、外国系労働者に対する必要性が高まっていった。

7 階建て、9 階建ての高層建築が密集する端島/軍艦島においては、上階ほど眺望や居住環境に優れていた。他方、下階部はほとんど日照もなく、湿気も激しく、荒天の際には波が入り込む部屋もあった。したがって、上階には職員層、中階には礦員層、下階には下請け労働者層、そして最下階に朝鮮系労働者たちの住居が割り振られた。中国系労働者は、鉄条網で囲まれた木造二階建ての収容寮に居住させられており、朝鮮系と中国系の労働者は、採炭現場においても居住区においても、接触する機会を奪われていた(守る会 2011: 25)。終戦後、朝鮮系労働者は 1945 年 10 月末、中国系労働者は 11 月末に帰還した。

1960 年代の最盛期には約 5,200 人が居住しており、人口密度は 87,650 人/km^2 に達していた[5]。1960 年代以降、石炭から石油へのエネルギー転換政策の影響を受け、日本の石炭

[4] 1944 年の労働者数に対する、死亡率は日本人 1.9%、朝鮮人 2.4%、中国人 3.9%であった(守る会 2011: 121)。

[5] これは当時の東京都 23 区の人口密度の約 9 倍である。

産業は衰退し始める。この島もまた例外ではなく、1974 年 1 月に閉山し、全住民が退去した。

２．端島/軍艦島の再発見

19 世紀後半の操業開始から 1974 年の閉山までの期間、端島/軍艦島はもっぱら採炭のためにのみ存在していた。それゆえ、無人島化したこの島は、地域社会においてすら忘却され、少数の建築学研究者と釣り人が訪れるのみであった。しかし、ポスト近代と呼称される 1980 年代の後半以降、この島の持つ多様な側面が、社会的、文化的価値を有するものとして再発見さていった。

端島/軍艦島の再発見には相対的に独立した二つの動向がある。ひとつは、後述する学術研究の対象としてこの島を評価する動きである。もうひとつは、廃墟あるいは別様の時間が流れるトポスとして、すなわち一種の審美的対象として捉える動きである。後者に関しては、1986 年に雑賀雄二と州之内徹が出版した写真集『軍艦島──捨てられた島の風景』を皮切りに、断続的に出版された写真集によって確認することができる。

1990 年代に入ると、端島/軍艦島再発見の動きは加速する。動因となっているのは、この島に与えられた世界遺産候補という意義付けである。その背景には、文化遺産に関する制度変化がある。まず第一に日本政府が 1992 年にユネスコ世界遺産条約を批准したことである。さらに、1996 年に導入された文化財登録制度は、明治以降の近代建築物を主たる対象としており、これが近代産業関連の廃墟に文化財としての価値を発見しようとする動きに拍車をかけた。その結果、これまで廃墟として放置されてきた建築物、あるいはそれまで単なる生活の場であった場所がグローバルな文化的、歴史的価値を内包した遺産として認識され、価値付けられるようになった。

端島/軍艦島は 1990 年代末以降の廃墟ブームの中で、「廃墟の聖地」と呼ばれるようになる。西欧の廃墟へのまなざしが 18 世紀に古代ギリシアとローマの遺跡の発掘を通して生み出されていったのに対し(木村 2007: 7-8)、日本における廃墟ブームのまなざしは、明治から昭和にかけての遺物に向けられているところに特徴があり、無限の成長を幻視することのできた近代という時代に対するノスタルジーと密接に関わっている。すなわち、グローバルな文化的枠組みの変容とポスト近代におけるメンタリティの変容が交叉するところに「廃墟の聖地」としての端島/軍艦島という言説が生まれたのである。

この時期は、世界レベルで近現代の記憶の再編が活発化した時期とも重なる。第二次世界大戦の終結から約半世紀が過ぎた 1980 年代末以降、ドイツや日本で近現代史の再定義や歴史書再編の動きが活発化し、近隣諸国の知識人やメディアも巻き込んだ論争に発展した。ドイツにおける歴史家論争(Historikerstreit)にしろ、日本における歴史教科書問題にしろ、ポスト近代の歴史叙述における言語論的転回を反映して、ただ「ひとつの『真実』を定位すること」ではなく、「カテゴリーと記述」の立場性をめぐる政治が問題の核心にある(上野 2012: 2-6)。端島/軍艦島に向けられるまなざしもまた、同時代における言説

の政治の枠組みから自由ではない。

2001 年に三菱がこの島を高島町に譲渡したことをきっかけにして、「軍艦島を世界遺産に!」という運動が民間レベルで生まれ、行政もそれを支援する動きを見せるようになる。2005 年の町村合併により高島町が文化遺産の観光利用経験の豊富な長崎市に編入されたことにより、この動きはいっそう活発化した。2009 年 1 月にこの島は「九州・山口の近代化産業遺産群」の一部として世界遺産暫定リストに追加記載された。これらの動きを受けて長崎市は 2009 年 4 月に、制限付きではあるが観光客の上陸を認めた。市は年間の上陸者数を 2 万人と予測していたが、実際には上陸者数は、一年後の 2010 年 4 月 22 日には 5 万 9000 人に達し(『読売』[6] 2010. 4. 23 朝刊)、2011 年 10 月末に 20 万人、2012(平成 24)年 11 月に 30 万人を超えた(『長崎』 2012. 1. 16 朝刊)。この数字はこの島に向けられるまなざしが、上記のように質的に変容すると同時に、量的にも変容していったことを示している。

３．端島/軍艦島研究

端島/軍艦島に向けられるまなざしの質的、量的変化は、この島をめぐる研究動向にも反映している。わずか 0.06km^2 の無人島に関して、自然科学から人文科学に亘る多様な研究がなされてきた。

最も早い時期の学術的研究は、建築学系の実証調査であり、既に閉山前から成果が発表されている。1950 年代には、歴史的にも稀な超高密度居住空間という特徴に着目した研究が主流であった(一瀬 1952; 西山・扇田 1954)。閉山の年には長崎造船大学のグループが都市計画論的観点からの聞き取り調査を行っている(赤松(他) 1974; 小林(他) 1974)。東京電機大学が刊行した『軍艦島実測調査資料集』は端島/軍艦島研究に客観的な基盤をもたらしたデータ集成である (阿久井・滋賀 [1984] 2005)。2001 年以降、端島/軍艦島に関する研究論文の数は急激に増加するが、中心を成すのは一貫して建築学の枠組みに基づく都市計画論や住居学である。

人文・社会学的方法によって端島/軍艦島を研究する動きは、今世紀に入ってようやく開始された。社会学者の木村至誠は、2007 年以降、文化遺産論と集合的記憶論を結び付ける形で端島/軍艦島に関連した成果を多数発表している(木村 2007a, 2007b, 2009, 2010)。井上博登は、超高密度居住空間における共同体という視点から社会人類学的研究を行っている (井上 2010a, 2010b)。

端島/軍艦島研究に関する先行研究の多くに見られる問題点のひとつは、近代日本の炭鉱産業が持つ「負」の側面について十分に論じていないことである。既に触れたように、端島/軍艦島は「負の遺産」、すなわち戦争や災害の傷痕をとどめる場所としての側面を

[6] 引用注においては『朝日新聞』、『読売新聞』、『長崎新聞』は、『朝日』、『読売』、『長崎』と略記する。

強く持っている。ルポルタージュや小説という形でこの島の負の側面に光を当てようとする試みはいくつか発表されており(林 1992, 2010, 韓 2009)、「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」が中心となって朝鮮系・中国系労働者に関する資料の発掘も行われている(守る会 2011)。

木村は 2 編の論文の中で、この島の「負の遺産」としての側面に触れている。その内の 1 編は、「守る会」の調査結果を紹介し、同会および朝鮮系労働者の遺族による島の観光地化に対する批判に言及している(木村 2007b: 149)。もう 1 編では、「軍艦島を世界遺産にする会」のメンバーやツアーガイドの間に、「産業遺産の保存や活用に関わることによって、思いがけず歴史の意味付けをめぐるポリティクスに巻き込まれてしまう」という「戸惑い」があることが指摘されている(木村 2009: 426-427)。しかし、木村自身も認めているように、この問題についての言及は「紹介程度に」とどまっている(木村 2007b: 149)。

この問題を比較的詳細に検討しているのは、柴田弘捷である。柴田は、木村の指摘する「戸惑い」について、この島の世界遺産化を推進するステークホルダーたちは強制連行についての「判断を保留している」とやや異なる説明を行い、その背後に長崎市内の製造品出荷額の 7 割強を占める三菱重工長崎造船所への配慮、すなわち「三菱資本の『影』」を見て取っている(柴田 2009: 72-73)。他方で、柴田の論文の中では、木村の挙げるこの島が有する多様な側面[7]についての言及はわずかしかなされていない。

端島/軍艦島研究のもうひとつの問題点は、この島に向けられるまなざしの生成におけるメディア表象の影響という観点が欠けていることである。年間 10 万人近くの旅行者が、この島に上陸し、廃墟に直接目の当たりにしたいという欲望を抱き、それを行動に移すという現象は、メディアによる議題設定効果を抜きにして考えることはできない。実際、今世紀に入るとテレビや雑誌は端島/軍艦島について頻繁に報道するようになり、既に触れたようにこの島をテーマにした写真集も多数出版されてきた。「軍艦島」というキーワードで Web 検索すれば、関連するテクストや画像はもはや 1 日では閲覧しえない量に達していることがわかる。このように、この島に焦点化した言説と表象がメディア上で大量に流通することによって、岩礁とコンクリートの塊にすぎない無人島の存在が、地域を越えて集合的に想起され、それが上陸という行為を生み出している。すなわち、ステークホルダーたちに対する聞き取り調査や関連資料の掘り起こしという手法ではアプローチしづらい、マクロレベルの集合現象としての端島/軍艦島ブームに関しては、メディアテクストを対象にした分析が必要なのである。

本稿は、新聞記事を資料として、この島の「光」の側面と「影」の側面に向けられた「まなざし」の重層する言説空間の歴史と現在を概観する。資料を新聞メディアに限定し

[7] 木村は、この島に向けられる多様なまなざしを、「研究対象」、「廃墟」、「産業遺産」、「観光資源」、「地元」、「故郷」、「負の遺産」に分類し、これらが重層し交錯する場としてこの島を描き出そうとしている(木村 2007b: 143-147)。

たのは、新聞記事のデータは、他のメディアテクストと比較してはるかに系統的にアーカイブされており、傾向の変化の概観という本稿の目的に合致しているからである。ただし、データの数量的側面については、別稿にて詳論しているため[8]、図表の提示と知見の要約にとどめ、本稿では具体的な記事の言説分析に力点を置く。

４．新聞記事の量的変化

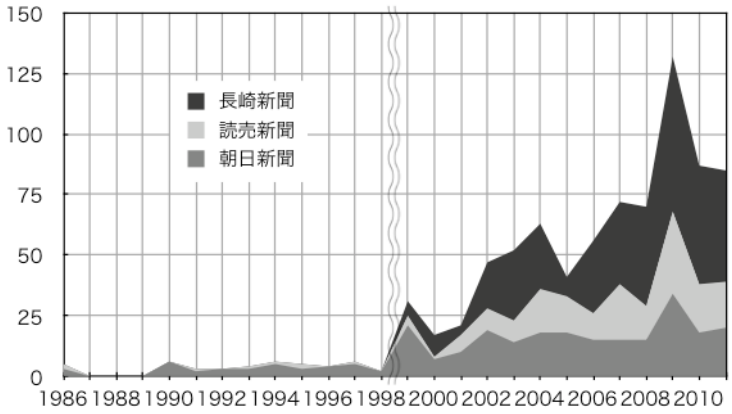

図 1. 端島/軍艦島関連記事件数の時系列変

調査対象として取り上げたのは、全国紙『朝日新聞』と『読売新聞』、地方紙『長崎新聞』の計 3 紙である[9]。これらに掲載された端島/軍艦島関連の記事、総数 855 件の時期的変化、および個々の記事が言及する端島/軍艦島の側面の時期的変化を検討する。図 1 は、1986 以降の端島/軍艦島関連の記事数の年次変化を示している[10]。『長崎新聞』のデータは 1999 年以降のみであることを明示するために波線を付している。1974 年の閉山の際に『朝日新聞』に 4 件の記事が掲載されているが、それ以降 1985 年までは総計で 5 件の記事が確認できるにとどまるため、図 1 からは除外している。

1986 年に 5 件の記事が書かれているのは、端島/軍艦島の最も近くに位置する高島炭鉱がこの年に閉山したことに因る。それ以降 1990 年までこの島に言及した記事は 1 件も存在しない。このことから、端島/軍艦島は、戦後 30 年に亘ってメディア報道の対象とな

[8] 『中国名城』(国家名城委)に投稿中。
[9] 具体的には、以下の記事をデータとした。
①『朝日』(1945 年～2011 年 12 月)
2010 年前半期の朝刊販売部数は約 796 万部。b. 1945 年～1983 年の記事は、「朝日新聞昭和紙面データベース」から抽出。東京最終版の記事のみ収録。a. 1984 年以降の記事は、データベース「聞蔵Ⅱビジュアル for Library」から抽出。東京最終版と地方版の記事全てを収録。
②『読売』(1986 年～2011 年 12 月)
2010 年 11 月の朝刊発行部数は約 1003 万部。1986 年 9 月以降の記事をデータベース「ヨミダス文書館」から抽出。東京最終版と地方版の記事全てを収録。
③『長崎』(1999 年～2011 年 12 月)
2010 年前半期の発行部数は約 18 万 4 千部。長崎県内のシェアは 30.11％で 1 位。1999 年 7 月以降の記事を「G-search データベースサービス」から抽出。
[10] 1945 年から 1985 年までの『朝日新聞』における端島/軍艦島関連の記事は、総計で 11 件にとどまっており量的な検討には向かない。

ることはほとんどなく、1974 年の端島炭鉱閉山と 1986 年の高島炭鉱閉山に際して一時的に焦点化された後、再び忘却されていったことが確認できる。

端島/軍艦島に関する記事がコンスタントに掲載されるようになるのは 1990 年代に入ってからであるが、記事数は年に一桁にとどまっており、顕著な増加を見せるのは 1999 年以降のことである。同年 6 月に端島砿閉山 25 周年記念祝賀会が長崎市内で開催され、11 月には元住民たちが島に上陸し、これをきっかけにして「軍艦島を世界遺産に!」運動が生まれた[11]。この時期、旧産炭地の自治体は、人口減少と衰退の危機に直面しており、旧炭鉱施設を、産業遺産というグローバルな枠組みの中で再文脈化することによって、観光地として再利用しようとする動きを見せていた。そこに廃墟ブームや戦後史の見直しの動きなどが結びつく形で、端島/軍艦島についての報道は急激に増加したのである。

端島/軍艦島関連の記事数は 2009 年に急増している。これは、2009 年 1 月の世界遺産暫定リストへの記載と 4 月以降の観光客の上陸解禁という大きな出来事を反映している。メディア表象は、基本的には現実の出来事を映し出すものである。しかし他方で、メディア表象こそが現実の行動や出来事のきっかけとなる。新聞記事の量的変化のみによって、表象と現実との間の因果関係を確認することはできないが、少なくとも新聞報道によって、読者が端島/軍艦島の存在を想起する機会、あるいは、初めて認識する機会が、1999 年以降圧倒的に増加したことは確かである。

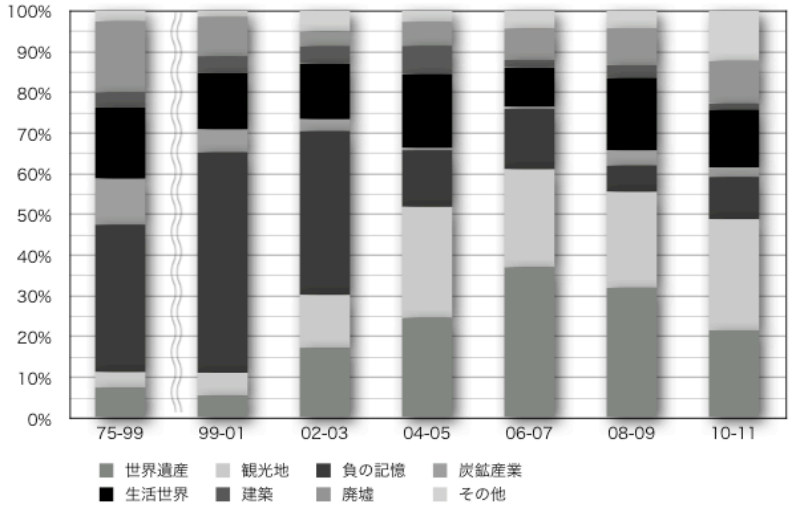

図 2. 新聞記事が言及する端島/軍艦の諸側面の時系列

次に、メディアはこの島のどのような側面に焦点を当ててきたのか、すなわちこの島に向けられる読者のまなざしをどのように編成しようとしてきたのか、その全体的傾向を確認する。

ここでは、端島/軍艦島の持つ側面を、「世界遺産」、「観光地」、「負の記憶」、「炭鉱産業」、「生活世界」[12]、「建築」、「廃墟」、「その他」に区分し、個々の記事に関してこれらの側面への言及をカウントした。

図 2 からわかるように、新聞記事が光を当てる側面は時期により大きく変化している。2003 年までは端島/軍艦島をめぐる「負の記憶」への言及が中心となり、他の側面につい

[11] NPO 法人「軍艦島を世界遺産にする会」としての認証は 2003 年。理事長は坂本道徳。
[12] 「生活世界」とは、端島/軍艦島がひとつの都市として住民たちにとっての生活世界であったという側面を指す。

ての言及は副次的であった。

しかし 2000 年代に入ると傾向に変化が生じ、端島/軍艦島を「世界遺産」あるいは「観光地」として見るよう読者のまなざしを編成する傾向が顕著になる。二つの側面についての言及は変化傾向を同じくしており、世界遺産化と観光地化が密接に結びついていることを示唆している。2004 年頃には、「世界遺産-観光地」に着目する記事が主流を占めるようになる。この島が「九州・山口の近代化産業遺産群――非西洋世界における近代化の先駆け」という枠組みの中で、「顕著な普遍的価値を持つ可能性が高い」として、2009 年 1 月に世界遺産暫定リストに追加登録されたことは、こうした動きのひとつの到達点であり、記事数の変化もこれを裏付けている。すなわち、2004 年以降の新聞記事の量的変化からは、「世界遺産-観光地」という側面に光を当てる傾向が圧倒的に強まり、「負の記憶」という側面が周縁化される傾向が見て取れる。次節では、個別の記事を検討することによって、この傾向の具体的現れを確認する。

５．80 年代までの言説の配置

1945 年から 1973 年まで約 30 年の間、端島/軍艦島が分析対象となった新聞において取り上げられた事例は 8 件にすぎない[13]。すなわち、閉山の前年まで、この島は超高密度居住空間を有する炭鉱島として認識されてはいたが、全国的なまなざしを集めることは極めて稀だったのである。最も早い 1952 年の記事の見出しは「人口密度は世界一　長崎港外の“軍艦島”」であり、この島の居住空間の特異性を焦点化している(『朝日』 1952. 8. 11 朝刊)。しかし、その後の記事では、たとえば「採炭中止のため　二子坑で出火　長崎沖の“軍艦島”　全国初の保安事故」(『朝日』 1952. 12. 4 朝刊)、「三菱鉱業端島鉱の配転交渉妥結」(『朝日』 1964. 9. 28 朝刊)に見られるように、基本的には全国に数ある炭鉱の中のひとつとしてこの島は位置付けられていたことがわかる。

閉山の年である 1974 年には 5 件の記事を確認できる。オイルショックの翌年の出来事であったため、石油に依存したエネルギー政策に対する批判という新たな文脈が付け加わってはいるが、ここでも基本的には石炭産業をめぐる環境の変化の一事例としてこの島が取り上げられている。換言すれば、「世界遺産」[14]、「観光」、「負の記憶」といった側面が全国紙において着目されることは、この時期まで全くなかったのである。

端島/軍艦島をめぐる「負の記憶」についての言及が初めて見出されるのは、東京電機大学編の『軍艦島実測調査資料集』について報じた『朝日新聞』1984 年 5 月 20 日の記事に引用された同大学の研究者、阿久井喜孝の言葉の中である。

資本家が労働者をこの島に閉じ込めて労働を強いたことは確かにあります。しかし、

[13] ただし、この期間の分析対象としたのは『朝日新聞』の東京版と大阪版のみである。『長崎新聞』、『西日本新聞』等のローカル紙やブロック紙に関しては、他日を期したい。
[14] 世界遺産条約は 1972 年のユネスコ総会で採択されている。

私たちは、海によって外界とし(ママ)や断された高密度な住空間で、どのようなコミュニティーが発達したかに目を向けました。(『朝日新聞』 1984. 5. 20 朝刊)

ここでは強制労働についての言及はなされてはいるものの、その対象に朝鮮系・中国系労働者が含まれていたことを読み取ることはできない。阿久井の議論の力点は、あくまでも超高密度居住空間におけるコミュニティに置かれている。このことは「高層・過密に適応した住民」、「日本近化の縮図《軍艦島》」、「まさに団地生活の手本」、「屋上を緑で飾り、プライバシーにも気配り」という大小の見出しにも現れている。その結果、「日本近代化の縮図」という言葉の意味は極めて限定的なものへと縮減される。

端島/軍艦島に向けられるまなざしの変容を示唆しているのは、上で触れた写真集『軍艦島――捨てられた島の風景』の写真家、雑賀雄二へのインタビュー記事である。この記事では、「人の手を離れて機能を失ったモノが、別のモノになって生きている、と感じた」という雑賀の言葉が引用されている(『朝日』 1986. 6. 6 夕刊)。この記事からは、石炭の産出という唯一の存在価値を失ったこの島に、新たな価値を見出そうするまなざしがこの時期に生まれつつあり、雑賀らの写真集と新聞記事と連携によってそれが映し出され、増幅されていったこと知ることができる。

6. 90年代の言説の配置

1988 年に、韓国・朝鮮人や台湾人を対象にした戦後補償が社会問題として浮上する。この問題が作り出す社会的文脈の中に端島/軍艦島を位置付けようとする記事が現れるのは、2 年後の 1990 年のことである。この年『朝日新聞』には 7 件の端島/軍艦島関連の記事が掲載されているが、雑賀の新しい写真集を取り上げたものを除くと、全て「負の記憶」に焦点を当てたものである。これらの記事のキーパーソンはルポライターの林えいだいである。1990 年 8 月に、強制連行関連の資料を収集する過程で林は、崎戸町役場が保管していた旧崎戸炭鉱の「埋火葬認可交付簿」に出会う。この記録には「本籍、氏名、生年月日、死因、職業、死亡年月日、死亡の場所、墓地、火葬土葬の別などが記入されている」(『朝日』 1990. 8. 28 夕刊)。この資料の発見に先立つ 1986 年には、「守る会」が旧高島町役場において同種の資料である「火葬認許証下附申請書」(通称「端島資料」)を発見している。これらの資料によって、長崎市周辺の炭鉱で亡くなった労働者の中に占める朝鮮系および中国系の労働者の人数、出身地、労働環境などが明らかにされた。

1990 年代の半ばに入ると、それまではほとんどメディアに現れなかった主体の声が言説空間に流通するようになる。それは、「生活世界」としての端島/軍艦島に関する元住民の声である。「多田会長は『住民同士の結び付きが強かったので、端島には楽しい思い出しかありません。荒廃した島は、私たちの墓地を見るようで、寂しいです』と話した」(『朝日』 1994. 1. 14 夕刊)。元住民の組織「端島会」のメンバーが声の主体として新聞記事に現れるのはこれが最初である。この記事のもうひとつの特徴は、「また、端島に

は終戦時で、約五百人の朝鮮人鉱員がいたと言われているが、実態はまだはっきりしていない」という一文によって締めくくられていることである。ここでは「強制連行」という出来事は行間に暗示されているにとどまっているが、「生活世界」という側面と「負の記憶」という側面がひとつの記事の中に同時に現れている。

７．2000 年以降の言説の配置

21 世紀に入ると、この島を元住民たちにとっての回顧の対象にとどめることなく、近代日本の国民的記憶の場として文脈付けようとする言説がメディア上に流通するようになる。この傾向の転換を明確に画しているのは、2001 年 3 月の『朝日新聞』の記事である。この記事は、2000 年に NHK で放送された連続ドラマ『深く潜れ～八犬伝 2001～』の主要な舞台のひとつがこの島であり、同番組のサイトには同年 12 月末までに 3205 件の書き込みがあったことに触れた後、阿久井らの『軍艦島実測調査資料集』の復刊を同時代的な現象として関連付けている。この記事の中で初めて「ノスタルジー」という言葉が端島/軍艦島を修飾する言葉として使用されている。しかも「ノスタルジーと美しさ」という並列がなされていることは注目に値する。記事の後半では、この島をテーマとする横浜市立大学の学生の卒業論文の結論部にある「近代日本の象徴」という言葉が強調されている。さらに、最後のパラグラフでは、若者たちが「廃墟の島」に惹かれる理由を、筑波大教授の門脇厚司が、「かつてひとつの目的に突き進んだ強烈なコミュニティー」に対する「あこがれ」として説明している(『朝日』 2001. 3. 8 夕刊)。ここでは「廃墟ブーム」、「ノスタルジー」といった端島/軍艦島に対する新しいまなざしが、「近代日本の象徴」というマクロな文脈の中に、学問的な権威とともに位置付けられているのである。さらにこの動きは世界遺産登録というグローバルな文脈へと合流していく。

端島/軍艦島の世界遺産登録を目指す運動の中心的存在は坂本道徳である。坂本は 1999 年 6 月 14 日の『読売新聞』において初めて登場する。この記事の中で強調されているのは「生活世界」という側面であるが、坂本の言説の中心に「住み方の記憶」[15]があるという点は現在まで一貫している。しかし、2001 年 10 月に島が三菱から高島町に無償譲渡され、豊田定光町長が、「交流人口の増加を目指した整備に道筋がつき、端島を含めた町の観光施策の将来を見据えて取得した。建築学的に貴重との声もあり、世界遺産への登録申請も考えている」という考えを表明した時期から(『長崎』 2001. 11. 27)、坂本は「住み方の記憶」を、より大きな文脈の中に置き直そうとする。上の記事の 2 日後の『朝日新聞』の記事の中では、坂本の「［1999 年 10 月に島を再訪して］以来たびたび端島を訪れた。少しずつ崩壊していく姿を目の当たりにして危機感を抱いた。『ふるさとを残したい」という感情が芽生えた』という言葉が引用されている。記事はさらに以下のように続

[15] 坂本が中心となって NPO 軍艦島を世界遺産にする会が編纂したムックのタイトルが『軍艦島――住み方の記憶』(2008)である。

く。

> だが、今は「ふるさと」以上のものを端島に見いだす。「炭鉱は日本の産業を支えてきた一方で、戦時中の中国・朝鮮人の強制労働という歴史も持つ。日本近代化の明暗を併せ持つ歴史遺産としての価値がある」と［坂本は］いう。（『朝日』 2002. 11. 29 朝刊）

この記事からは、坂本が日本の近代化の光と影がひとつの場所で交錯するトポスとしてこの島を捉えていることが読み取れる。また、上で引用した 2001 年 11 月 27 日の『長崎新聞』の記事末尾には、「日本初の高層鉄筋アパートなど近代建築史上貴重な遺構として、さらに戦時中の中国・朝鮮人の強制連行の歴史を刻む島として保存を求める声がある」という解説文が置かれている。つまり、今世紀初頭においては、「近代産業遺産」登録という文脈の中でこの島の光と影を同時に捉えようというまなざしがステークホルダーたちの間に共有されていたのである。

しかし、2002 年末を境に、島に関連した記事の絶対数が増加する中で、島の二つの側面に同時に言及した記事はほとんど見られなくなる。「世界遺産-観光」に焦点化した記事と「負の記憶」に焦点化した記事は、あたかも異なった島について報じているかのように、島の一方の側面にのみ光を当て、他の側面についてはテクストの外部へと排除している。この傾向は現在まで一貫しており、855 件の記事の中で、双方の側面に言及しているものは 12 件(1.4%)を数えるにすぎない。

これら 12 件の記事には二つの類型を見いだすことができる。ひとつは、端島/軍艦島の「負の記憶」を前景化する文脈の中で、対立項として世界遺産登録と観光地化の動きに言及するタイプである(『長崎』 2010. 2. 18;『長崎』 2010. 8. 10;『読売』 2011. 2. 12 西部朝刊;『長崎』 2011. 8. 5)。これらの記事は、メディア空間の中を流通する「世界遺産-観光地」という圧倒的多数の言説に対する対抗言説として現れたものである。もうひとつの類型はこれとは対照的に、「世界遺産-観光地」あるいは「生活世界」という側面を前景化する記事の中で、対立項として「負の記憶」に言及するという構造を持っている。ナガサキピースミュージアムの専務理事増川雅一が、同ミュージアムを会場として「軍艦島を世界遺産にする会」の主催で開催された「軍艦島『住み方の記憶』」展に関して、「朝鮮人らが強制連行され、軍国主義を支えた島でもある。軍艦島の果たした役割について考えるきっかけになれば」と話したことが記事の末尾に直接引用されるといった例がこれに当たる(『朝日』 2009. 12. 31 朝刊)。

二つの類型の記事は、スタンスとしては対照的であるが、ひとつの共通点を持っている。それは、「世界遺産-観光地」と「負の記憶」という二つの側面を相互排他的なもの、あるいは少なくとも異質なものとして表象していることである。このことは、上で引用した 2002 年の坂本の発言、「炭鉱は日本の産業を支えてきた一方で、戦時中の中国・朝鮮人

の強制労働という歴史も持つ」という言葉遣いに端的に表れている。あるいは、2008 年の『長崎新聞』の記事の末尾の一文、「世界文化遺産を目指す動きもあるが、「負の遺産」の側面があることを忘れないようにしたい」(『長崎』 2008. 1. 11)、2009 年の『読売新聞』の記事の中の坂事の言葉、「軍艦島には日本の未来を考える材料がある。正の歴史にしても負の歴史にしても、現在の軍艦島は人の営みによって生まれたという点が、魅力のひとつではないか」(『読売』 2009. 3. 17 西部朝刊)も同様に、二つの側面を並列させる。

2010 年の『長崎』の中で直接引用されている岡まさはる祈念長崎平和資料館の理事長高實康稔の言葉、「軍艦島の近代化産業遺産としての側面だけでなく、強制連行など負の歴史を持った島であるという全体像をつかむきっかけになれば」(『長崎』 2010. 2. 18)、あるいは、元朝鮮系労働者の言葉、「［世界遺産登録］について全面的に反対するわけではないが、端島で韓国人が生き死にした歴史を抹殺して、観光地としてだけ利用することは絶対に認めることはできない」(『長崎』 2011. 8. 5)もまた、論点の並列であると解釈できる。しかし、これらの引用の中には、not only A, but also B という構文を見出すことができる。この接続方法は単純な逆接である not A, but B よりも論理的構築性が高い。つまり、これらの引用には、この島の持つ二つの側面を論理的ないし因果的に関連付けようとする方向性が胚胎しているのである。

この方向性を明確に前景化している唯一の記事は、元朝鮮系労働者であり、原爆被災直後に市街地の救援作業に動員されたことで入市被爆者ともなった崔璋燮が、約 65 年ぶりにこの島に上陸した際に語った言葉である。

> 島の世界遺産登録を目指す動きについては、「［強制連行による労働があったという］事実を正しく伝えることで、世界の人々にとっての遺産になる」と［崔は］訴えた。(『読売』 2011. 2. 12 西部朝刊)。

ここで崔は、端島/軍艦島が「負の記憶の場」であることを世界遺産としての価値と結び付けて論じている。このような論理的枠組みを持った記事が一件のみしか存在していないところに、この島をめぐる今日の言説空間の特質が端的に現れている。

８．ヘテロトピアとしての端島/軍艦島

崔の言葉にもあるように、「負の記憶」と世界遺産登録は必ずしも排除し合う関係にあるわけではない。たとえば、奴隷貿易の拠点であったセネガルのゴレ島やホロコーストの現場であったアウシュヴィッツ強制収容所跡は、既に世界遺産制度の最初期(1978/79 年)に、「顕著で普遍的な意義を有する出来事［…］と、直接にまたは明白に関連するもの」という基準に照らして遺産認定されている(UNESCO 2005)。広島市の原爆ドームもまた、この基準を満たしているがゆえに、1996 年に世界遺産に登録された。このように、近代

化が生み出した「負の記憶」関連の遺構もまた「世界遺産」の要件を満たしうる。ところが、日本の世界遺産登録申請の動きにおいては、原爆被災のように戦争被害を想起させる文脈では「負の遺産」に「普遍的価値」が認められているのに対して、加害を想起させる遺構の価値は排除される傾向が顕著である。

端島/軍艦島が良質な産炭地として日本の近代化の一端を担っていたという過去の事実、および他の産炭地と異なり閉山前の建築物が撤去されずに残っているという現在の状況は、この島を「近代化産業遺産群の構成資産」として価値付ける際の根拠である。その意味で、この島は近代日本の光の部分を象徴していると言うことができる。しかし、日本の急速な近代化が植民地主義と結びつくことで様々の「傷痕」を生み出したことを考えるなら、この島の光と影は互いを互いの条件としていることを否定することはできない。

これに関連して上野千鶴子は、「近代総力戦は、国民国家最大の事業であり、地政学的・人口学的・象徴的闘争の場である」と述べている(上野 2012: 20)。この立場からすれば、戦争遂行のために石炭の増産を図ったことと、そのために朝鮮や中国から労働者を強制的に連行し、過酷な労働に従事させたことは、直接的な因果関係を持っている。端島/軍艦島はかかる意味において「日本近代化の縮図」なのである。

ところが、元住民が「端島には楽しい思い出しか」なかった、「島に人の温かみがあった」(『朝日』 2010. 1. 11 朝刊)という言葉とともにこの島を想起し、「日本近代化の縮図」として意味付けようとする一方で、別の記事の中では、いかなる連累(implication)[16]の上にこの島の現在はあるのかを問う別の主体が「負の記憶」を想起せよと声を上げているのが現状である。

このように、端島/軍艦島が有する多様な側面は、互いに因果の糸で結ばれているにもかかわらず、個々の主体にとっては、ひとつの側面のみが前景化した形で立ち現れる。少なくともこの島に関するメディア表象はそのような言説配置を行っている。新聞メディアは、ほとんどの場合、二つの側面を別個の記事へと分離し、ひとつの記事の中で言及する場合には論理の希薄な並列の関係に置くことによって、両者を結ぶ因果の糸を不可視化している。

ミシェル・フーコーは、「それらがたまたま指し示していたり、映し出していたり、反映したりしている関係の全体を疑ったり、無効にしたり、転倒させたりする仕方で、他のあらゆる場と関係している、奇妙な性質をそなえた場」、「他のあらゆる場と関係しながら、それらとは矛盾する空間」を、「ヘテロトピア(heterotopia)」と呼んだ(Foucault 1986: 24)。ユートピアとは対照的に、ヘテロトピアは現実の空間の中に見出される場所であり、「文化の内に見出される他のあらゆる現実の場を表象したり、転倒させたり、またそれらに戦いを挑んだりする対抗−場(counter-sites)であるような現実の場」である(Foucault

[16] テッサ・モーリス=スズキが提示した概念。「わたしは『他者』を具体的に迫害しなかったかもしれないが、正当な対応がなされていない過去の迫害によって受益した社会に生きている」(モーリス=スズキ 2002: 57)。

1986：24)。それは「現実の中に位置を占めているけれども、あらゆる場所の外側にある」という意味で、他の場所とは異質な「他なる場所」であり、「他者の場所」である(Foucault 1986：24)。

> 「ユートピア」は人を慰めてくれる。[…] だが「ヘテロトピア」は不安を与えずにおかない。むろん、それがひそかに言語をほりくずし、これとあれを名付ける(name this *and* that)ことを妨げ、共通の名を砕き、もしくはもつれさせ、あらかじめ「統辞法」を崩壊させてしまうからだ。(Foucault 1966=1974：16)

端島/軍艦島が「日本近代化の縮図」であるならば、そこは「他のあらゆる場」と関係を持つはずであり、近代日本が内包する矛盾は、「超高密度居住空間」の中で解き難いアポリアとして立ち現れるだろう。この島は自らに向けられた多様なまなざしを、あるいはまなざしの主体の欲望を、時に転倒させ、時に対抗させる。この意味で、端島/軍艦島は、「他なる場所」であり、「他者の場所」である。

端島/軍艦島について報じる新聞記事は、この島の持つ諸側面を「これとあれ」という形で名付け、ヘテロトピアの諸局面を分離ないし並置することによって、この島の「不安を与えずにおかない」性質を不可視のものとしてきた。しかし、先に触れた元朝鮮系労働者、崔の言葉にあるように、日本と東アジアの近代化の光と影が調停不可能な形で集約されたヘテロトピアとして捉えるときに初めて、この島は「顕著で普遍的な意義」を有する世界遺産たりうるのではなかろうか。

〔日本語文献〕

赤松公人・有川博・片寄俊秀・久米村涼，1974，「軍艦島の生活環境：(その 1) 生活環境形成史(都市計画)」 『日本建築学会研究報告九州支部 2 計画系』 日本建築学会 21：209-212.

阿久井喜孝・滋賀秀實，[1984] 2005，『追補版 軍艦島実測調査資料集――大正・昭和初期の近代建築群の実証的研究』 東京電機大学.

韓水山，2009，『軍艦島　上・下』 安岡明子・川村亜子(訳) 作品社.

小林康博・藤永 廣美・片寄 俊秀，1974，「軍艦島の生活環境：(その 2) 島内生活管理の構造(都市計画)」 『日本建築学会研究報告九州支部 2 計画系』 日本建築学会 21：213-216.

後藤恵之助・坂本道徳，2005，『軍艦島の遺産――風化する近代日本の象徴』 長崎新聞社.

林えいだい，1992，『死者への手紙――海底炭鉱の朝鮮人坑夫たち』 明石書店.

――――，2010，『筑豊・軍艦島――朝鮮人強制連行、その後』 弦書房.

市原猛志(編)，2008，『九州・福岡における近代化産業遺産に関する基礎的研究――「近

代化遺産総合調査報告書」から見るその定義と特徴』 日本建築学会.
井上博登，2010a，「端島炭鉱「軍艦島」の生活」 『社会情報』 札幌学院大学総合研究所 19 (2)：211-217.
――――― 2010b 「炭鉱社会像の多様性へむけて――「軍艦島」におけるヤサイブネとアキナイ」 『現代民俗学研究』現代民俗学会 2：81-90.
木村至聖，2007a，「文化遺産イデオロギーの批判的検討――近代西欧の廃墟へのまなざしを手がかりに」 『ソシオロジ』 社会学研究会 51 (3)：3-19.
――――，2007b，「コモンズとしての産業遺産――長崎市高島町における軍艦島活用を事例として」 『京都社会学年報』京都大学 社会学教室 15：141-168.
――――，2009，「産業遺産の表象と地域社会の変容」 『社会学評論』60 (3)：432.
――――，2010，「『軍艦島』をめぐるヘリテージ・ツーリズムの現状と課題」，『社会情報』札幌学院大学総合研究所 19 (2)：225-234.
モーリス=スズキ・テッサ，2002，『批判的想像力のために――グローバル化時代の日本』平凡社.
村串仁三郎，1974，「高島炭坑における納屋制度の解体過程――明治期高島炭坑の労務管理近代化過程の分析(下)」 『経済志林』法政大学経済学会 42(1)：1-66.
長崎在日朝鮮人の人権を守る会，『軍艦島に耳を澄ませば――端島に強制連行された朝鮮人・中国人の記録』，社会評論社.
西山 卯三 ・扇田 信，1954，「軍艦島の生活」 『住宅研究』彰国社 4：41-51.
雑賀雄二・州之内徹，1986，『軍艦島――捨てられた島の風景』 新潮社.
柴田弘捷，2009，「『記憶』の無人島・軍艦島――廃墟の島・長崎県端島」，『専修大学社会科学研究所月報』 専修大学社会科学研究所 8・9 月合併号 59-75.
上野千鶴子，2012，『ナショナリズムとジェンダー 新版』 岩波書店.

〔欧米語文献〕

Foucault, M., 1986, “Of other spaces”, Diacritics, 22: 22-27.
――――, 1966, Les Mots et les Choses. Une archéologie des sciences humaines, Gallimard (=1974, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物』新潮社)
UNESCO, 2005, “The Criteria for Selection”, UNESCO World Heritage Centre, (2013 年 3 月 20 日取得, http://whc.unesco.org/en/criteria/)